

の世にも有べからず、まして去年の逆徒由井正雪等が火を放ちて、兵を起さんと謀りし事もあり、はいかさま只事にはあらしと、上中下の心も静かならず、其時信綱の立所に執り行ひし事殊に皆其所を得て、程なく天下また静かに治りて、昔にかはらぬ世となるか、る事どもは、みな古の名臣賢佐にも恥ぢぬ善政にてありけり、それも執政の人々の衆議一決してこそかくはありけめども、謗る事譽むる事をも、信綱壹人の計りしやうに、世にいひしことは、是れ併しながら名譽のいたす所なり、

〔智囊〕一家光公川○鶴 或時御夜詰の時分、たかのをき繩之様成、夥敷ながき糸をまきたる物を、此長

さいかほど可有哉、急につもりて参れと被仰出、則御小性衆小細工部屋へ被致持参、色々つもり候へども、無限長き糸を卷たる物なれば、中々即時にはえれがたし、御前よりは御急ぎなり、迷惑したる所へ、伊豆守松平信綱被参、其積にては、則時には成がたし、安き事ありとて、其糸を十尋ひろいて、切此糸目をかけ、其重きいかの大巻の目を貫目にかけて、そろばんにてつもり、其ながきを申上げれば、則時に埒明、御機嫌殘所無之、是も豆州はやき才なり、則時に御用相足り、皆々かんじ入後迄も被申けると也、

〔常山紀談十九〕細川家の長臣南條大膳恨をふくむ故有て、細川家を傾ん事を謀りけるに、其比深く密にする事ありて、泄なは細川家の禍なる事を知たりければ、先切支丹の事訴へけり、江戸より南條をめす、細川家驚きたれどもせん方なし、松野龜右衛門我にまかせられよとて、囚人なれば厚き板にて詰牢をつくり、醫者一人に密謀を云ふくめ、熊本より出るに、天氣を待とて、處々に舟をとめ日を経る内に、人參の入たる薬をあたへ、朝夕の食物まで人參湯にて飲食させけり、南條は氣の鬱したる上、人參數十斤飲たりじかば、心狂亂したりけり、松野江戸に打具し至りて、南條は數年狂氣の者にて候とて、出しけり、切支丹認の事を問るゝに、狂言のみなりとて、熊本に歸